

国際会議報告

ASCON-IEEChE2018 の報告

東京農工大学 亀山秀雄

はじめに

昨年(2018年)の11月4日～7日にかけて台湾の日月潭でThe 6th Asian Conference on Innovative Energy and Environmental Chemical Engineering (ASCON-IEEChE2018)が開催されました。

この国際会議は、1988年に流動層の国際会議 ASCON として東京で始まり、2008年にエネルギー・環境分野に範囲を広げた ASCON-IEEChE として発展改組し、日本、タイ、台湾、韓国, 日本を經由して今回の台湾で30年目になる長い歴史のある会議です。2014年の韓国大会から P2M セッションが設けられました。本学会としては、2年に1回の国際会議で P2M の学術論文を発表できる場として活用しています。ここでは、会議の様子を報告します。

1. 開催プログラム

会議は、10か国から114名が集まり5日の開会式に始まり基調講演と9つのセッションでの54件の口頭発表と73件のポスター発表が6日までありました。最後の7日はテクニカルツアーが行われました。参加者数は、同伴者を入れると140名ぐらいになりました。参加国別人数を表1に、セッション別発表数を表2に示します。

全体として化学工学系の環境とエネルギー関係の研究分野を網羅しています。その中で、P2M セッションは、異色の存在ですが、基礎研究ら応用研究へと発展

し、実証試験に進み最後に事業化までを考えた場合、P2M の存在は重要であることが化学工学分野の研究者に理解されたため、2014年から P2M セッションが加えられるようになりました。

表1 参加国別人数

| 参加国 | 参加人数 |
|------|------|
| 台湾 | 50 |
| 韓国 | 27 |
| 日本 | 17 |
| 中国 | 9 |
| タイ | 6 |
| ロシア | 2 |
| インド | 1 |
| USA | 1 |
| ソロモン | 1 |
| 合計 | 114 |

表2 セッション別人数

| セッションテーマ | 発表数 |
|----------|-----|
| 基調講演 | 2 |
| 流動層関係 | 4 |
| 環境保全 | 10 |
| P2M | 6 |
| 触媒・材料 | 5 |
| 燃焼・ガス化等 | 5 |
| バイオマス | 9 |
| 水素 | 3 |
| エネルギー変換 | 5 |
| 膜分離 | 5 |
| ポスター発表 | 73 |
| 発表合計 | 127 |

表3 P2M セッションでの発表者と論文タイトル

| Session C (Nov 5, 10:20-12:00, Room C) Project and Program Management | | |
|---|---------------|---|
| Chair: Hideo Kameyama and Yoshiaki Wada | | |
| Keynote Speech | Kunio Yoshida | The Role of P2M in Changing Industrial and Business World |
| C1 | 17 | Yoshiaki WADA |
| C2 | 92 | Hironori TAKUMA |
| C3 | 119 | Hideo KAMEYAMA |
| C4 | 120 | Toshihiro SHIMBO |
| C5 | 128 | Hideo YAMAMOTO |
| General discussion | | |

2. P2M セッションでの発表

5日の午前中にP2Mセッションが組まれていました。吉田先生による「The Role of P2M in Changing Industrial and Business World」の基調講演に続いて、5件の研究発表があり、最後に総合討論が行われました。会場には40名程度の聴衆者が集まり、日本のP2Mの手法に聞き入っていました。特に韓国の主要研究者のDr. Sang-Don KIM教授とDr. Yong KANG教授は、最前列に座り熱心に聴いていました。吉田先生によると韓国でも政府が支出する研究費による研究の管理者の必要性が高まっているので、日本のP2Mによる研究管理に関心が高くなっているとのことでした。これに関してのプログラムオフィサーの仕事内容については、本号の記事をご覧ください。プログラムの詳細はホームページ<http://www.ascon2018.org.tw/index.html>をご覧ください。論文は、まだWeb上からダウンロードできないようです。興味のある論文は亀山まで問い合わせいただければ、pdfでお送りいたします。

3. セレモニー

5日最初のオープニングセレモニーでは、吉田名誉会長が挨拶に立たれ、化学工学のこれからの進むべき方向を述べられる中で、P2Mの手法を化学工学の中でも活用することが必要であると述べられました。その宣伝効果もあってか、

P2Mセッションに多くの聴衆者が集まったと思われまます。

6日の夕方からバンケットが開催され、その席上で吉田名誉会長が今までのASCONE会議の功績を称えて表彰されました。その返礼に会議の様子を日本の和歌で詠んだ歌が日本語と英語で表示した吉田名誉会長のスピーチは、参加者一同に感銘を与えていました。詳しい和歌の内容は、このP2Mマガジンで紹介されることでしょう。

4. おわりに

今回の論文は、改めて学術雑誌「*Energies*」に投稿して査読審査を通過すればASCONE特集号として掲載されることになっています。この雑誌のインパクトファクターは2.67と高い雑誌です。前回のASCONE2016は、JCEJのVolume 51 Issue 9にP2M関係が3報掲載されています。国際P2M学会の編集委員会では、ASCONE2018に発表した論文は、国内での発表と同じ扱いで投稿すれば査読審査されることになっています。次回のASCONEは2020年11月に韓国で開催されることになりました。この年は、P2M学会創立15周年の年になります。国際的にP2Mを宣伝するタイミングとして良い時期と思われまます。多くの方の発表を期待しています。

2018年12月24日受理

A) 5・7・5

Poem 俳句 (Haiku)

秋来るも

みどり 色増す 山並みや

赤丸の

日の沈みゆく 秋の湖

B) 5・7・5・7・7

Poem 和歌 (Waka)

日月の 光輝き

ASCONの 長き歩みを 祝いけるかな

再訪の 水辺に立てば

今さらに 老いの姿が 現れ映る

November 5, 2018

吉田 邦夫

Kunio Yoshida